

Beowulf における image について

A Study of the Image in *Beowulf*

山 口 和 世

I

Beowulf は legend, folk-tale, chronicle の三つの要素が長い年月の間に混合して成立し、⁽¹⁾ 放浪する吟遊詩人によって歌われたものとされている。そのためか、*Beowulf* の武勇伝（中心部）と Heremod, Hengest に関するくだりや Hrothgar と Ingeld の間で起こる戦いの話、その他の挿話（脱線部）の占める位置の軽重が本末転倒しているとして、*Beowulf* の構造上の欠点が指摘される場合がある。⁽²⁾ 即ち、legend、及び、folk-tale 的要素と chronicle 的要素が関連と調和を欠いているとされるのである。また、Grendel 母子と火竜退治の二つの話によって構成されている *Beowulf* の英雄行為はその類型が各地に見られることから解るように、単純すぎる傾向があると考えられている。主人公にしても個性は全くなく、type 化してしまっていると批判されている。*Beowulf* に対するこうした評価は、別の時代の、あるいは、手法を異にする文学作品を基準としたものではないかと考えられるが、たとえこうした評価の存在を容認するとしても、この物語の構造の統一をはかり、outline をふくらませ、登場人物を豊かに描き出し、主題を鮮明にする役割をしているものに *Beowulf* 固有の image がある。*Beowulf* に関する研究の多くが social history, literary history, Biblical exegesis を扱っているなかで、H. G. Wright はこの物語の純粋な formal analysis を行なっている。⁽³⁾ 本稿は H. G. Wright の研究を参考にしながら、image による物語の統一に焦点をあてて論を進めて行こうと思う。

II

Beowulf において中心となる重要な image は “light”, “darkness”, “fire” である。まず、“light” の image に対し、副次的に反復して現われる image としては、

第一群（神，理想的英雄）

God (Lord), saint, good king, queen, hero, warrior

第二群（宴会）

feast, mead seat (mead house, mead dwelling, wine building)

第三群 (武器)

weapon, sword, corslet, banner, shield, armour, ensign, buckler, hilt, helmet.

第四群 (宝物)

treasure, ornament, great costly store, bracelet, gold, ring, necklace, trinket, precious stone, jewel, gem.

第五群 (調和音)

harp, timbrel, song, cheerful sound, laughter.

第六群 (明るい自然, 動物)

sun, moon, morning, tree, leaves, hawk, eagle, steed.

の image があげられる。これらの image は honour, magnanimity, courage, virtue, strength, loyalty, life, joy, good, peace, gentleness といった抽象観念と結びつく。一方, “light” とは対極点に立つ “darkness” の image は否定的価値を持った次のような image,

第一群 (荒地)

moor, mere, fen, cliff, crag, surging sea, hell.

第二群 (怪物)

elf, monster, giant, devil, demon, evil spirit, dragon, sea-wolf, raven.

第三群 (血)

blood, gore, murder.

第四群 (異教)

Cain, pagan.

第五群 (不協和音)

clamour, dirge, chant.

第六群 (荒天, 夜)

winter, mist, wind from north, storm, night, sunset, shadow, cloud.

を連鎖的に呼び起こし, death, sorrow, fear, feud, evil, war, danger, treachery という抽象観念を導き出している。

Beowulf の冒頭に位置する Scyld 王についての短い話はこの物語全体の pattern を示している。Scyld 王の “honour”, “valour”, “peace” に満ちた治世と死期が迫った王の宝物, 武具を積んだ舟での漂流の旅がその内容を形成しているが, これは, 若い *Beowulf* の Grendel 母子退治と火竜を倒しつつも自らも傷ついて死に, 宝物, 武具とともに火葬にふされる老王 *Beowulf* の話に対応している。image の大きな流れもこの pattern に沿って展開している。即ち, “light” が前半部で優勢を占めているのに対し, 後半部は “darkness” とそれに伴う陰鬱な雰囲気支配的である。

“light” を基軸とする image は Grendel 来襲前の Heorot

Quickly it came to pass among men in due time that it was perfect; the greatest of hall dwellings; he whose word had wide sway gave it the name of Heorot. He broke not his pledge, he bestowed bracelets and treasure at the banquet. The hall towered up, lofty and wide-gabled.

Grendel 退治の旨を伝えるために Hrothgar 居城へ向う Beowulf 一行の描写,

The street was paved with stones of various colours, the road kept the warriors together. The war corslet shone, firmly hand-locked, the gleaming iron rings sang in the armour as they came on their way in their trappings of war even to the hall.

Breca との競泳中海獣に対する Beowulf の勝利を語る挿話,

but in the morning they were cast up on the shore, wounded with swords, laid low by blades, so that no longer they hindered seafarers on their voyage over the high flood. Light came from the east, bright beacon of God.

Grendel との闘争に対する Beowulf の確信,

when the morning light of another day, the sun clothed with sky-like brightness, shines from the south over the children of men.

Grendel 退治を祝い宴会の箇所等に見られる。“feast”の image は生命的な喜びや価値を現わしており，“feast”の場で歌われる“song”は常に調和を示すものとして用いられている。“treasure”は *Beowulf* においては王の magnanimity, 及び, 戦勝を象徴しており, 現われる頻度が極めて多い image である。

“treasure”を与える場所として, また, “feast”を催す場所として四方に輝く Heorot に夜 Grendel が忍び寄って来るのに伴って, “light”に満ちた場面は一転して “darkness”に侵入される。“light”と “darkness”の鮮明な対照と配置方法はこの物語に劇的な効果を与えている。Scandinavia 地方の古代の生活を材料とし, Christ 教信仰の影響が濃厚なこの物語において, “light”は常に “God”の観念を想起させる。天地創造後の最初の被造物である “light”を避ける怪物 Grendel は “God”の怒りを受けた “Cain”の末裔とされており, “grim spirit”, “the deadly creature”, “the foe of men”, “the dread lone visitant”, “the monster, the giant,” “the shadowy creature”などと説明されている。これらの

説明は抽象的なものである。⁽⁴⁾ 漠然とした説明こそ人々が Grendel に対して抱いていた底知れない恐怖感を反映するのに適していると言えよう。

They possess unknown land, wolf-cliffs, windy crags, a dangerous fen path, where the mountain stream falls down under the darkness of the rocks, a flood under the earth. That is not a mile hence where the mere stands; over it hang rime covered groves; the wood firm-rooted overshadows the water. There each night a baleful wonder may be seen, a fire on the flood. There is none so wise of the children of men who knows those depths. Though the heath-stepper hard pressed by the hounds, the hart strong in antlers, should seek the forest after a long chase, rather does he yield up his life, his spirit on the shore, than hide his head there. That is an eerie place. Thence the surge of waves mounts up dark to the clouds, when the wind stirs up hostile storms till the air darkens, the skies weep.

という場所に住む Grendel は “feast”, そこで歌われる “God” の栄光を讃える歌に深い憎しみを抱く。その出現によって、本来的には眠りをもたらず “night” は “murder” に血塗られて, “death” を意味するようになる。朝になれば危害を加えた Grendel も Heorot を去って行くが、その後には “blood” が残されている。“night” と “blood” の結合は当然考えられることであるが, “morning” と “blood” は相容れない image であるだけに, Grendel の行為がもたらす凄惨な状態が浮き彫りにされる。“twelve winters” の間続く Grendel の残虐行為の結果, 北欧の平原に燦然と輝く Heorot から “light” は消え, あらゆる生物が暗黒の中に, 死に絶えてしまう長い冬が続くのである。短い夏の光も, さし込む余地はない。“twelve winters” は synecdoche の表現であるが, そこには表面的表現以上の事を読みとることができる。

Beowulf と Grendel の戦いに先行する Beowulf と海獣の戦いは前奏曲的な機能を有していて, 二つの戦いの間には image の上で多くの parallel が見られる。Beowulf は “night”, “wild wind from north”, “surging sea” の中で, the woven battle garment, adorned with gold” を身につけて苦闘する。しかし, 先の引用に明らかなように, “morning” の訪れとともに, Beowulf に敗れた海獣は陸地へうちあげられ, その後海行く人々の “life” が保障されることになる。Beowulf と Grendel の戦いは “the storm of battle” と描写され, その間 Heorot には “clamour” が響き渡る。Grendel の母親を倒した直後の部分には, “fire” が浮かぶ暗黒の “mere” 一面にさし込む “light” の見事な描写がなされている。

The gleam was bright, the light stood within, just as the candle of the sky shines serenely from heaven.

Grendel とその復讐を企てた Grendel の母親が一掃されて、

the building towered up wide-gabled and gold-plated; the guest slumbered
within till the black raven merrily proclaimed the joy of heaven.

となる。この箇所における “raven” の意味には、非常に深いものがある。今迎える夜は、“slumber” を約束する。夜はもはや “blood”, “death” へと発展することはない。Heorot も光を取り戻す。不吉の鳥 “raven” さえもその鳴く声が陽気なものに聞こえ、長い “darkness” の後に再び “light” が蘇ったことを喜ぶ気持ちが最後の一行に溢れ出ている。

“darkness” と同じく否定的価値を持つ image に “fire” がある。“fire” は明るいものではあるが、*Beowulf* においては一貫して破壊力の象徴として用いられている。火竜が持つ破壊的な “fire” に対して立ち向う Beowulf が “gold-friend of Geats” とされているのは興味をひく表現である。“hostile fire”, “dread flame”, “deadly fire”, “war flame”, “dark flame”, “battle flame(fire)”, “dread hot flame”, “fierce surges of flame”, “blast of breath”, “greediest of spirits” あるいは “flame shall devour”, “the fire consume” という表現は、いずれも “fire” に対する人々の恐怖感を示したものである。こうした “fire” に対する恐怖が集約されて火竜の話を作り出したのではないかと思われる。暗い荒野に凄まじく光る落雷、すべてを無にしてしまう “fire” は古代の北欧人にとって何物にも勝る恐怖であったろうと考えられる。

Heorot の破壊をもたらす Hrothgar と Ingeld の戦いを予告した。

The time was not yet come when the feud between son-in-law and
father-in-law was fated to flare out after deadly hostility.

に始まり、暗黒の中を殺戮のために Heorot へやって来る Grendel の描写、

A baleful light, like flame, flared from his eyes.

を経て、吟遊詩人が宴会の席で歌う Hnæf と Hildeburh の息子の火葬は、火竜の話と火竜との闘争によって傷ついた Beowulf の火葬への伏線となっている。“fire” の image は火竜の話の部分に頻出する image であるが、同時に “darkness” を中心とする image も続出する。一方、“light” を基調とする image はその力を弱めて行く。image の面においても、老年に達し、若い頃の力を失った Beowulf, そして、彼の迫り来る死が現われていると言えよう。情景描写はそのまま Beowulf と作者の心理を描き出している。ここでは、火竜が隠し貯える “treasure” は錆びたままになっており、王侯の “magnanimity” や “life” と結びつく

ことはない。武将の “swift steed”, 城内を飛ぶ “hawk”, 宴会の “harp” の音もない。代りに, “dark raven” が不快な声で食べた死肉の数を誇る。“freasure” は “fire” によって包み溶かされ, また, Beowulf が火竜から奪った “treasure” は彼の死とともに土中に埋められてしまう。

they let the earth keep the treasure of earls, the gold in the ground,
where it yet lies, as useless to men as it was before.

“treasure” は Beowulf の若い頃のように, 積極的価値を示すものとは考えられない。“treasure” のこの象徴的な表現と相俟って, Beowulf の火葬で終るこの物語の最後は, “fire”, “smoke”, “darkness”, “the tumult of the wind”, “dirge”, “chant”, “cry of weeping” の image に満たされ, Beowulf 亡き後に出来する事件の暗示となっている。“sad” という語とその派生語が間隔を置いて弔いの鐘のように繰り返され, Beowulf の挽歌⁽⁵⁾において極点に達する。

Ⅲ

Beowulf の image の特徴の一つは限定された範囲内の image とその反復による, 生命と死, 調和と破壊, 神と悪といった主題の提示, 及び, 物語の有機的統一にある。広がりや欠いた固定的な image は, 必ずしもこの物語の欠点であるとは言えないと考えられる。吟遊詩人によって歌い語られるという条件の下では, image の反復は音楽における key-note と同じ効果を持っており, elegiac な性格の強いこの物語の聴衆は, 単純な筋の英雄伝を貫く鮮烈な image が持つ implication によって, 英雄に対する強い賞賛や哀愁をそそられたであろうと考えられる。語り手と聴衆は全身でもって物語の中に陶醉し, 英雄と一体感を味わうことができたのではないかと思われる。

注

- (1) Charles W. Kennedy, *Beowulf, the Oldest English Epic, Translated into Alliterative Verse with a Critical Introduction* (Oxford, 1940), p. xli.
- (2) W. P. Ker, *The Dark Ages* (Edinburgh and London, 1904), pp. 252-253.
- (3) “Good and Evil; Light and Darkness; Joy and Sorrow in Beowulf,” *An Anthology of Beowulf Criticism* (1966), pp. 257-269.
- (4) 大山俊一, 『曖昧の逆説的明確性——Beowulf 詩人の感覚——』, 「複合的感覚——アレゴリーとシンボリズム——」(東京, 1960), pp. 32-36.
- (5) H. G. Wright, op. cit., p. 267.